

onaishigeo



きつといつで
も馬駆けつける

*anata ga anata ja nakereba
yokattanini*

onaishigeo

きつといつでも駆けつける

ライブハウスでどこかのバカが放り投げたペットボトルのコーラを頭から浴びたわたしに買ったばかりのタオルマフラーを貸してくれた彼は、ゲイだった。

女が開口一番「彼氏いるから」と予防線を張るのと勝るとも劣らない早さのカミングアウト。大音響の中でたぶん大声で会話していたはず。

「おれ、ゲイなんだ」

「K? なにそれニックネーム？」

「ゲイ! ホモだよホモ！」

噂に聞く優しいホモ。それが彼。

わたしは男が苦手で、だけど誰かと寄り添っていないと死んでしまうという、いわゆるメンヘラで、黙っていても、極論離れていても、わたしの気持ちを慮ってくれる「異性」を心の底から欲していた。

だって.....同性と抱き合うなんて気持ち悪いじゃない。

「ホモって女とキスできるの？」

「出来るよ...あまりしたくはないけど」

「心が女ってわけ？」

「そーゆんじゃない。それ、たぶん性同一性障害と混同してるから」

どっちだっていい。不作法にわたしの中に入ってこなければそれで。

「ね、お願いがあるんだけど頼まれてくれない」

猫なで声で言い寄るわたしに彼は警戒感を顕わにしていることを明確に伝えるためか、わざとらしいくらいに思い切り眉をひそめた。

「難しい話じゃないの。わたしと一晩、一つのベッドで寝てくれると嬉しいなって」

あっけにとられる彼。

「もしかして家出少女？」

「違う違う」

「あんまお金持ってないよ」

「だから違うって」

台本でそうしろと書かれてでもいるように彼は腕組みをして悩みはじめた。

意味が分からなくて当然だ。何しろわたしとあなたは知り合ってまだ30分。ライブハウスの奥の小さなテーブル越しに、強制的に500円で買わされた缶ビールを飲み交わしているだけ。一般的にはどう考えたって訳あり。

「疑うんなら逆にお金あげてもいいよ」

「いやいらなしい。でも全然分からないんだけど」

「いいの、分からなくて。それとあとね、出来れば裸で。何もつけないで」

「それ...いったいどういう意味があるの？」

「別に意味なんてないよ。単なる興味。ホモってどんな感じなのかなーって」

彼は正直なまでに露骨に嫌な顔をした。それでも怒って立ち去りはしない。罵ることもない。たぶん、慣れているのだろう。からかわれること、ネタにされること、無理解であること。ただ、これだけではあまりに不親切だ。

「ねえ、たとえば信頼について考えることはない？」

「なんだよ唐突に」

「あなただってゲイという少数派なんだから考えてるはず。少数派、マイノリティー？　そういう人たちって基本孤独なんですよ？　だから知りたいはず。誰が信頼に足りて誰が足りないのか。何が信頼すべき情報で何が信頼できないのか」

「いや別にそんなこと考えてないし」

「うそ。だってあなた、いきなり最初にカミングアウトしたじゃない。あれ、あなたも信頼に足りる何かを彷徨い求めてた証拠」

凶星だったようで彼は目を伏せた。

「だから、試してみない？　この世の中に信頼できる人間は存在するのかしらないのか」

「だけどそれ、君の得になるだけで、俺はちっとも関係ないと思うんだけど」

「あるよ。わたしがあなたを信頼すれば、あなたは『自分を信頼しているどこかの誰か』を手に入れるんだから。よく考えてみて。これってものすこいことだよ」

腕組みをしたままの彼が今度は目をつぶった。

「あなたがどこかで傷ついても、誰かに傷つけられても、見ず知らずの誰かが密やかにだけど心からあなたを信頼してるわけ。わたしなら興奮するけどな」

彼は何かを想像するに至ったようで、目をつぶったまま何度も頷いた。そして目を開け

「ま、いいか」

と眩き残っていたビールを飲み干した。席を立つ合図。つまりゲームが始まる合図。

私鉄の、特急が止まらない駅から歩いて数分のアパート。彼の部屋はゲイはきれい好きという噂

通りによく片付いていた。

「いいよ。どうすればいい？」

シングルベッドの脇に立った彼が振り向く。少し不安な表情。

「じゃ、脱いで」

彼はわたしにうながされるまま着ているものを脱いでいった。全てを脱ぎ捨てた裸の彼は取り立てて特徴のない中庸な肉体。

その様子を見届けて、わたしも着ている物を全て脱いだ。そのわたしの体をじっと見つめる彼。

「どう？ むらむらしてきた」

「...わるい。ごめん」

期待通りの反応に満足し、先にベッドに潜り込む。しばらく躊躇うように立ち尽くしていた彼が、やがて部屋の灯りを消してわたしの横にきた。触れるでもなく触れないでもなく、狭いベッドの中で彼のぬくもりを探る。

これが彼の肌。これが男の息づかい。これが人間の体温。これが生き物の鼓動。わたしが一つ一つ確かめているその刹那に、同性を愛するという彼は何を思い感じていたのだろう。

唐突に彼が口を開いた。

「俺が...俺ホントはゲイじゃないんだけどって言ったら」

「言ったら？」

「どうする？ たとえばいきなり襲ってきたりとか」

「それは一、つまり、警戒心をなくさせるためにゲイだって言ったんだとしたら、ってこと？」

「そんな感じ」

「それは一」

それはただ単に陳腐な日常。欲するものが全て手に入るはずがない。わたし達は幾度も裏切り裏切られ、痛みの中で如何にダメージを最小限に抑えるかを学ぶ。

つまり彼の言うとおりの「そんな感じ」だったとしたら、知恵が一つ身につくということ。

そう、わたしたちは知恵のために生きているのだ。

「いいよ。それでも」

わたしがそう言うと、彼は半身を起こしてわたしの顔をのぞき込んだ。

「もう二度と会わないのに俺のこと信じるって？」

「そう」

「絶対に会うことないのに、俺もあんたのこと信じるって？」

「そう。絶対」

唐突に彼が泣き出した。見る見る涙が頬を伝い、わたしの胸に流れ落ちた。

「ずるいよ」

どっちが眩いた？

それは分からなかったけど、確かにずるい。わたしが泣くつもりで、わたしが彼の胸に顔を埋めるつもりだったのに、いつの間にかわたしが泣きじゃくる彼を抱きよせ、背中をさすりながら、わたし自身も泣いていた。

やがて彼は泣き疲れて眠るだろう。それを見届けて、わたしも眠りにつく。しかし明日の朝、目覚めても話すネタはもう残っていない。わたしは彼と視線を合わせることもなく黙って部屋を出るだろう。

ただ、わたしは彼の幸福を願う。それがいったいどういうものなのか、どんな状況や環境や関係を指し示すのかは全く分からない。それはまるで、わたしの幸福が何であるかが全く不明であるように。

それでもわたしは願うだろう。

きっといつでも駆けつける

2013/10/24

<http://p.booklog.jp/book/78294>

著者 : onaishigeo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/onai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78294>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78294>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ